

「ろしあ亭」

畔上 明

東京神田の「本の街」神保町で親しまれてきた「ろしあ亭」が、昨年10月末をもって閉店したことで、残念な思いでいらっしゃる方もおられることでしょう。

1951年生まれの北市泰生さんは芦別の高校を卒業後1970年代初頭の学生運動の影響で日大法学部を中退。その時から新宿のロシア料理店「スングリー」で働くこととなり腕を磨いて、1995年7月に「岩波ホール」近くのすずらん通りに「ろしあ亭」を開いたのでした。

映画大国作品とは異なる隠れた秀作の上映に努めた「岩波ホール」の顧客はもとより、昭和の名画をテーマごとに上映する「神保町シアター」での鑑賞帰り、或いは界隈の楽器店へ、山愛好家がスポーツ店に寄ったついでに、また古書店を巡り歩いた先にと「ろしあ亭」の馴染み客は広がっていったのでした。

看板メニューの中の赤いボルシチと白いビーフストロガノフが鮮やかな紅白の対をなしていますが、サンクト・ペテルブルクのストロガノフ宮殿内のレストランで味わったビーフストロガノフが、日本の多くの店で見られるようなハヤシライスのような色ではなく、ストロガノフ伯爵から伝わる本場では白いソースがかかっていたこともあり、「ろしあ亭」のオリジナルを踏襲したであろう調理にその心意気を感じたものです。

4年前からのコロナ禍で多くの飲食店の経営が苦しい思いをしていた数年を「ろしあ亭」も歯を食いしばる思いで乗り越えたところに、2年前からのロシア軍のウクライナ侵攻、ロシアとの関わりのある仕事は大打撃を受ける中、これも何とか乗り越えつつある矢先のことでした。



市川に再オープンした「ロシア亭」と店長の北市さん

神保町の歴史ある古書店が変化しつつあること、2022年7月に岩波ホールが閉館したこと、そんな状況も「ろしあ亭」が姿を消した要因になっているのかもしれない。

新しい年を迎えて、大学時代にロシア文学を共に専攻

していた旧友から、在住している市川の街にロシア料理店が誕生したのでそこで再会しようとの誘いを受けました。そして訪れたJR総武線市川駅より南に徒歩5分のゆうゆうロード沿いの店が、何と神保町から移転した「ろしあ亭」だったのでした。北市さんの尽力により、僅か1ヶ月の後2023年11月27日に千葉県市川市で営業を再開したということでした。小規模ながらも本格的なロシア料理を味わうことが出来るということで1、2階共に満席状態、予約していた2階席では2年前にウズベキスタンのアンジジャンからやってきたという青年が対応してくれました。高齢の母と神保町で映画を観るたびに「ろしあ亭」を愛用していたことを覚えて下さった店長北市さんとの再会も嬉しいことでした。

「ろしあ亭」の思い出の一つに、2006年「第一回日露観光交流促進協議会」のご苦労さん会を店全体を借り切って催したことがありました。モスクワでの会議を終えて帰国後、国交省観光課課長が指定した店が「ろしあ亭」、音頭を取って旅行業関係者が集い「継続は力なり」と挨拶をされ、その後の交流拡大に期待をもった、そんな時代だったのでした。